

# 平成25年度 調査遺跡発表会

よろい  
甲を着た古墳人からのメッセージ

## 古墳時代の火山災害と 金井東裏遺跡

日時 | 6月23日(日) 午後1時～午後4時  
会場 | 高崎市文化会館 1階ホール



公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 平成25年度 調査遺跡発表会 日程表

### ●発表会

時間	内容	発表者
12:00～13:00	開 場	
13:00～13:05	諸注意・日程説明	司 会
13:05～13:10	開 会 挨 拶	理 事 長 須田榮一
13:10～13:35	「群馬県の火山災害と考古学」	ハッ場ダム調査事務所資料課長 坂口 一
13:35～14:00	「金井東裏遺跡で発見された古墳人」	調査部調査2課長 桜岡正信
14:00～14:10	休 憩	

### ●シンポジウム

時間	内容	発表者
14:10～15:55	「古墳時代の火山災害と金井東裏遺跡 —甲を着た古墳人からのメッセージ—」	
	シンポジウム開始	司 会
	パネリスト紹介	資料部資料統括 徳江秀夫
	○九州大学大学院教授：田中良之 ○専 修 大 学 教 授：土生田純之 ○当 事 業 団 理 事：右島和夫	
15:55～16:00	閉 会 挨 拶	事業局長 大木紳一郎

#### ■パネリスト略歴

##### ○田中良之（たなかよしゆき）

1953年、熊本県に生まれる。

九州大学大学院文学研究科博士課程中退 博士（文学）

主な著書：1995「古墳時代親族構造の研究」柏書房、2008「骨が語る古代の家族」吉川弘文館

##### ○土生田純之（はぶたよしゆき）

1951年、大阪府に生まれる。

関西大学大学院文学研究科修士課程修了 博士（文学）

主な著書：2011「古墳」吉川弘文館、2012「多胡碑が語る古代日本と渡来人」吉川弘文館

##### ○右島和夫（みぎしまかずお）

1948年、群馬県に生まれる。

関西大学大学院文学研究科修士課程修了 博士（文学）

主な著書：1995「東国古墳時代の研究」学生社、2011「列島の考古学 古墳時代」河出書房新社（共著）

## ごあいさつ

群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和 53 年 7 月の財団法人として設立以来、平成 24 年度には公益財団法人に移行して、今年の 7 月で創立 35 周年を迎えます。これもひとえに皆様のご後援のたまものと感謝申し上げます。

さて本年の調査遺跡発表会は創立 35 周年の記念事業として、また、県の古墳情報発信事業に合わせて、「古墳時代の火山災害と金井東裏遺跡―甲を着た古墳人からのメッセージ―」と題して開催することとなりました。

金井東裏遺跡は渋川市にあり、平成 24 年 9 月から国道 353 号金井バイパス（上信自動車道）の建設にともなって発掘調査されています。「甲を着た古墳人」は、昨年 11 月下旬に、6 世紀の初めころに噴火した榛名山の火砕流で埋もれた溝の中から発見され、いちやく有名になりました。その後の調査では、火砕流に埋もれた古墳時代のムラの景観がそのまま残されていることが、続々と発見される遺構や遺物からわかってまいりました。本日は金井東裏遺跡の最新情報についてご紹介し、それらの成果についてシンポジウムを設けて、パネリストの先生方に金井東裏遺跡のもつ重要性をお話しいただくこととしました。

私たちは、ここで古墳時代の火山災害の実態にふれることができるとともに、一方では無念にも被災して命を落とした古墳人たちから多くのメッセージを投げかけられているのだと思います。そこに何を読み取り、現代そして未来に有益な情報として伝えていくことができるのかは、今後の私たちに課せられた大きな研究テーマといえるでしょう。

最後になりましたが、パネリストの田中先生、土生田先生、右島先生にはシンポジウムへの参加をご快諾いただき、厚く感謝申し上げます。皆様には、今後とも当事業団に対する一層のご理解とご支援をお願いしまして、開催のあいさつとさせていただきます。

平成 25 年 6 月 23 日

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田榮一

# 群馬県の火山災害と考古学

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
ハツ場ダム調査事務所資料課長 坂口 一

## 1 群馬県の主な火山灰と給源

火山県である群馬県の周辺は、古くから幾度かの火山災害を被ってきた地域である。災害をもたらしてきた代表的な火山は浅間山と榛名山で、浅間山は古墳時代前期、平安時代、江戸時代の3回、榛名山は古墳時代後期に2回、それぞれ大きな噴火を起こしている（表1・図1）。

いずれの噴火も県内外の広い範囲に火山灰を堆積させ、これは皮肉にも遺跡を現在まで良好な状態で保存する結果をもたらした。例えば、渋川市に国指定史跡の黒井峯遺跡がある。この遺跡は古墳時代における榛名山の厚い軽石層で埋没していたため、我が国の考古学における古墳時代の集落研究に貴重な資料を提供したが、こうした調査成果はかつて被った火山災害の賜物でもある。

表1 群馬県の主な火山灰（古墳時代以降）

名称	略号	年代
浅間A軽石	As-A	1783（天明三）年
浅間B軽石	As-B	1108（天仁元）年
榛名二ツ岳伊香保テフラ	Hr-FP	6世紀中頃
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA	6世紀初頭
浅間C軽石	As-C	3世紀後半

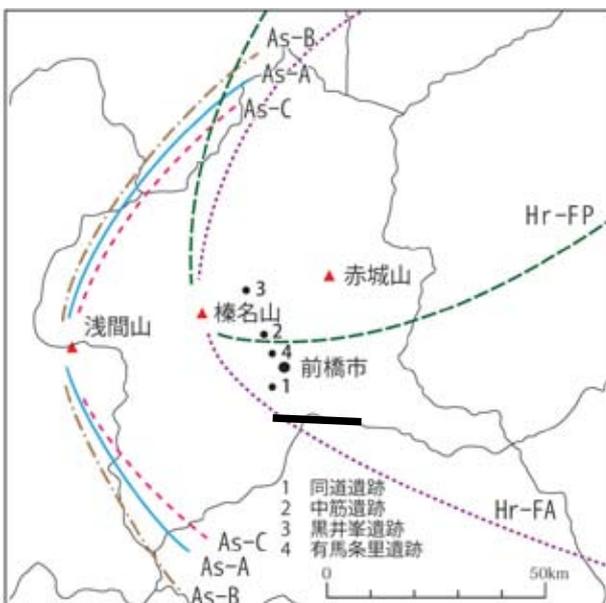


図1 群馬県の主な火山灰分布図（町田・新井1992）

## 2 古墳時代の火山災害遺跡

県下では数多くの火山災害遺跡が発掘調査されているが、このうち代表的な遺跡を以下に概観する。

**同道遺跡（高崎市）As-C** 3世紀後半の浅間山の噴火に伴う層厚10cmのAs-C層直下から、整然と区画された小区画水田が検出された（図2）。水田は当時の経済基盤を考える上で欠かすことのできない重要な遺構であるが、これが古墳時代の始まりの頃まで遡る貴重な資料となり、当時漠然としていたAs-Cの降下年代にも一石を投じる遺跡となった。

**中筋遺跡（渋川市）Hr-FA** 6世紀初頭の榛名山の噴火では、火山灰、火砕流、軽石などが噴出したが、この遺跡はこのうちの火砕流によって竪穴住居や平地式建物が焼かれた状態で出土し、悲惨な火山災害の実態が明らかになった（図3）。



図2 同道遺跡 浅間C軽石層で埋没した小区画水田



図3 中筋遺跡 FAの火砕流で被災した竪穴住居  
（渋川市教育委員会提供）



図4 黒井峯遺跡 F Pで埋没した古墳時代の集落  
(渋川市教育委員会提供)

くろいみね  
**黒井峯遺跡**（渋川市）H r - F P 6世紀中頃の榛名山の軽石層で埋没した、古墳時代の集落遺跡である。層厚2mにも及ぶ軽石層で埋没したあり様がイタリアのポンペイ遺跡に例えられ、日本のポンペイとも称されている。竪穴住居と平地式建物及び畠耕作地などで構成される古墳時代の集落構造が、全国で初めて明らかとなった（図4）。

### 3 被災と復興

火山の噴火は人間生活に大きな損害を与え、時には生命に危険を及ぼす場合もある。こうした火山災害に対して、古墳時代の人々がどのように対応してきたのかを、榛名山のF A及びF Pの2度の火山災害に見舞われた有馬条里遺跡を例にみてみよう。

**被災以前** 弥生時代中期に出現した竪穴住居群が、古墳時代中期の5世紀代まで継続的に営まれる。5世紀後半に竪穴住居はなくなるが、同じ場所が畠耕作地へと変わる（図5）。

**F A災害とその後** 5世紀後半の畠が、6世紀初頭の層厚10cmのF Aと1.5mの火山泥流で全滅する。しかし、この後の6世紀前半には火山泥流の上位が全面的に水田化される（図6）。

**F P災害とその後** F Aの火山泥流の上位に復旧された6世紀前半の水田が、6世紀中頃の層厚10cmのF Pと1.5mの火山泥流で全滅する。しかし6世紀後半には、火山泥流の上位に再び竪穴住居が出現し、これは11世紀代まで継続的に営まれる（図6・7）。

**復興** この遺跡では5世紀後半の畠がF Aと火山泥流で埋没した後は、その上位の全面が水田化された。層厚1.5mの泥流が覆うことで出現した平坦地を、巧みに利用して水田化を図ったのである。

また、この水田がF Pと火山泥流で再び埋没した後は、その上位が今度は居住域として再開発され、しかも



図5 有馬条里遺跡 F Aで埋没した古墳時代の畠  
(凹みは埋没途中の弥生～古墳時代中期の竪穴住居)



図6 有馬条里遺跡 F P泥流層上下の遺構  
(泥流を挟んで下位の水田(左)と上位の竪穴住居群(右))

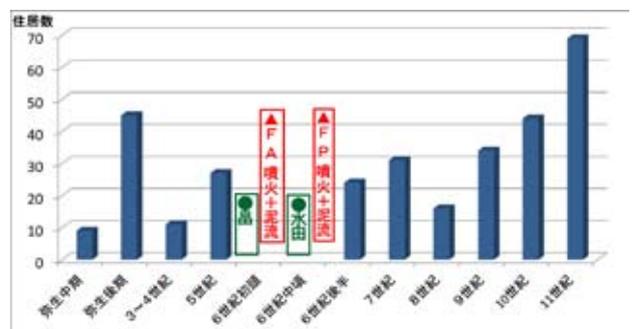


図7 有馬条里遺跡における集落の動向

この集落はその後平安時代まで500年間にわたって継続的に営まれていたことが判明した。

### 4 まとめ

火山災害遺跡では、被災の実態とともに通常の遺跡では得られない多くの情報を得ることができ、これを詳細に分析することは、当時の集落構造などの復元に重要な資料となる。また、これらを重層的に検討することで、災害への対応の歴史が明らかとなり、これは現代の防災に対する指針のひとつとして、過去からの貴重なメッセージでもある。

# 金井東裏遺跡で発見された古墳人

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
調査2課長 桜岡正信

## 1 はじめに

甲を着た古墳人は、当事業団が国道353号金井バイパス（上信自動車道）建設関連で発掘調査している金井東裏遺跡（渋川市金井）で発見されたもので、歴史的な一瞬は、平成24年11月19日のことであった。

金井東裏遺跡は、榛名山の北東麓に形成された扇状地の扇端部に位置しており、調査場所の標高は230mほどで、遺跡の東側には標高200mほどの平坦な地形が吾妻川まで続いている。この平坦面には、5世紀後半築造とされる坂下町古墳群や東町古墳などがある。また、吾妻川を挟んだ対岸には、黒井峯遺跡や白井遺跡群などの火山災害の様子をよく伝える諸遺跡が位置している。



遺跡の位置（国土地理院 1/25,000「金井」使用）

## 2 火山災害の痕跡

金井東裏遺跡には、古墳時代（6世紀代）に起こった榛名山の二度にわたる噴火の状況が明瞭に残されていた。表土の下には、2m以上の6世紀中頃の噴火に伴う榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP）が堆積し、6世紀中頃の薄い表土層を挟んで下に30cmほどの厚さの6世紀初頭の噴火に伴う榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA）が堆積している。これらの火山噴出物を噴出した榛名山二ツ岳は、遺跡の南西方向8kmほどの近い距離にある。Hr-FAを堆積させた6世紀初頭の噴火は、短い期間に複数回の噴火を繰り返したらしく、火山灰などの堆積物は、S1～S15の15ユニットに分けられている。



榛名山二ツ岳の軽石と火砕流堆積物

## 3 甲を着た古墳人の出現

甲を着た古墳人は、Hr-FAで埋もれた31号溝の中に倒れていた。31号溝の規模は、幅が1～3m、深さは0.5～1mほどと一定せず、調査区の西端から南東に向かい、さらに東へと蛇行しながら調査区域を横切るように40mほどが検出されている。溝の底面には砂礫の堆積が見られることから、水が流れた時期があったようである。

甲を着た古墳人は、この溝の東寄りのやや深くなった場所で噴火初期の火山灰S1の上に倒れ、S3とS7と呼ぶ火砕流堆積物に覆われていた。九州大学大学院の田中良之教授による現地調査および室内での詳細調査によって、甲内部以外のほぼ全身の骨が確認され、両腕とも肘を曲げて手のひらを顔の近くに置いて両膝を地面につき、両足ともに爪先立ちで頭を西に向け、うつ伏せに倒れていることがわかった。また、頭骨や大腿骨などから身長163cm前後の成人男性と判断された。新たな発見としては、顔の下に何らかの鉄製品があること、さらに腰のあたりに鹿角製とみられる柄を着けた刀子が確認されている。

身に着ていた甲は、小札を数百枚綴じ合わせた小札甲で、甲内外面には緘や綴じ紐などの情報も残っていることがわかっており、今後分析によって素材も明らかになってくる可能性がある。



甲を着た古墳人

#### 4 甲を着た古墳人の周辺状況

甲を着た古墳人の東側の溝の中からは乳児の頭骨の一部が発見され、さらに西に16mほど離れた場所からは、頭部を北東方向に向け、うつ伏せに倒れたガラス丸玉と



3号人骨



火砕流に埋もれた足跡



土器集積遺構

くだたま  
管玉の首飾りを着けた成人女性が発見されており、被災者は甲を着た古墳人だけではなくたことが明らかになってきた。一方、甲を着た古墳人の発見された場所の100mほど南の調査区では、S1を踏み込んだ東に向かう裸足の足跡が発見されており、いち早く避難した人たちもいたのであろう。

遺物では、甲を着た古墳人の西から出土した巻かれた状態の甲（2号甲）や、間から出土した20数本の矢、さらに5mほど西の溝の南から出土した鉄矛<sup>てつぼこ</sup>などがある。特に、2号甲は、CTスキャンによって草摺<sup>くさずり</sup>5段、長側4段、前側の<sup>たてあげ</sup>竪上4段の小札甲であることが確認され、内部に鉄とは異なる素材の遺物があることも判明している。また、鉄矛は、柄装着部の縁に装飾が施され、柄の基部に文様を刻んだ骨角を使った珍しいものである。

ほかに注目されるのは、足跡と同じ調査区から平地式建物が複数棟確認されており、さらに甲を着た古墳人の北西からは土器を積み上げた土器集積遺構、その北側の調査区からは古墳や畑が発見されており、被災直前の周辺状況も明らかになりつつある。

#### 5 おわりに

被災した古墳人や鉄矛などの遺物は、いずれもS1の上であり、S3に埋もれ、S7で完全に覆い尽くされていた。これは、榛名山の噴火が続く最中、火山灰に覆われたこの場に乳児を含む複数の古墳人がいるときに火砕流が発生し、巻き込まれて死亡したものとみてよいであろう。つまり、火砕流発生時の一瞬がパックされていたのである。

火山噴火が続く中、なぜ逃げる妨げとなる重い甲を着けたままでこの場所にいたのか。山の神を鎮めるためにこの場に止まったのか。それとももう一つの甲や弓矢、矛などを持って避難する最中であったのか。調査は現在も続いており、周辺の状況が鮮明になるのを待って、被災シーンの解釈は再考することになるだろう。

# 金井東裏遺跡出土火砕流被災人骨について

九州大学大学院比較社会文化研究院  
教授 田中良之

## 1 はじめに

群馬県渋川市金井東裏遺跡において6世紀初頭（古墳時代後期）の火砕流堆積物下から人骨が出土した。しかも、この人骨は小札甲こざねよろいを装着していた。きわめてまれな事例である。人骨は31号溝と呼ばれる溝の中にあり、甲を装着したこの人骨（1号人骨）の東には子どもの頭骨があり（2号人骨）、さらに西に女性の人骨（3号人骨）が出土し、溝以外でも1体（4号人骨）が検出されている。遺跡はまだ調査中であり、4号人骨もまだ未調査であるため、ここでは1号人骨を中心に2・3号人骨の概略を述べることにしたい。

## 2 1号人骨の概要

31号溝の中にあり、調査区東側から斜面上手、すなわち榛名山の方向に向かって倒れていた（図1）。全体が溝の中に収まっており、甲の上部はS7と呼ばれる火砕流堆積物に覆われていたが、下半はその前に噴出されたS3火砕流の中にあつた。しかし、熱による骨の変質はない。

今の段階では詳しい年齢はわからないが、成人の男性で、下肢は頑丈な印象であり、推定身長も163cm程度で当時の平均をやや上回る。両足は爪先立った状態で両膝を地面につけて前方に倒れている。その結果が拝礼しているような姿勢となっているのだが、左足を半歩ほど前方に踏み出した状態であり、この斜面を登っている時に被災し、膝から倒れたと考えられる。また、左右の大腿骨たいこつは左側に傾斜しており、膝をついて倒れてから、さ



図1 1号人骨（検出時）



図2 1号人骨下肢検出状況

らに左側へと溝の壁に寄りかかるように倒れている（図2）。したがって、この姿勢は死亡して倒れた結果である。甲の前をはだけている状況や、この姿から死の直前の苦しさや脱力の状況がうかがえよう。

甲の中は空洞が残り、その中で軟部組織が腐朽して胸郭ふきゆうと脊椎骨せきついこつが下へと落ちている。その際に骨盤が前方へと倒れ込み、脊椎と肋骨との関節も外れている。両腕を曲げて手は顔の両側にあり、右手は手をついたように掌側を下にしているが、左手は親指を内側にしてゆるく指を曲げており、小指を地面につけて薬指・中指がその上に乗った状態であった。姿勢がわかる程度には遺存していたが、保存状態は良好ではない。

さて、1号人骨は後頭部を欠いている。そして、この人骨と甲の上半部を覆っているのがS7火砕流堆積物であり、下半部はS3火砕流の中にある。この状況をみると、1号人骨はS3火砕流によって死亡し埋没したが、その後のS7火砕流によってS3の上半部を削り取られ、そこにS7があらためて堆積したと考えられる。後頭部はその際に破壊され吹き飛ばされたと考えられるのである。



図3 1号人骨左腕



図4 1号人骨左足

上の図3で人骨と火砕流堆積物の関係さをさらに見ると、左上腕の周りはS3火砕流であるのに、骨の周囲だけはS7火砕流が詰まっている。また、前腕はS3火砕流の中にあるが、腕のまわりは色が違っている。これらから、火砕流に埋められた後も、軟部組織が腐朽した後に空洞が残り、そこに上のS7火砕流が流入したり、S3が変色したりしたと考えられる。これは足でも同様であり、足の周囲にも空洞の存在を示す変色部分が認められた(図4)。足の周囲の空洞であることから、靴を履いていたことがうかがえる。そして、靴であるとしたら、つま先立った足にそって折れ返っているようであることから、革靴のような底の柔らかいものであったと考えられる。

ところで、両手はS3火砕流の中にあり、左手はゆるく指を曲げた状態であったが、指の骨を取り上げると、その下から鉄製品らしきものが出てきた(図5)。鉄は親指の直下から出てきたことから、左手は鉄製品をつかんだ状態であると考えられる。また、右手の内側にも鉄錆が見えることから、両手に鉄製品を持っていた可能性もある。さらに、頭の前下方にも鉄製品が確認されており、それと一つの器物をなす可能性もある。これらは今後のCTスキャンによる分析で明らかになるだろう。

### 3 2号人骨の概要

1号人骨の東に位置し、31号溝の壁に堆積したS3火砕流の中に頭骨の一部が張り付いた状態で検出された。骨壁は薄くサイズも小さいことから、乳児程度の「赤ん坊」と推定される。頭骨の一部のみであり、この場所で被災してS3火砕流に閉じ込められたか、別の場



図5 1号人骨左手と「鉄製品」(矢印)  
右は中手骨取り上げ後。線で結んだ部分が対応



図6 2号人骨(矢印)

所で被災しこの位置に運ばれてきて、体のほとんどを後続のS7火砕流に削り取られてしまったと考えられる。

#### 4 3号人骨の概要

1号人骨から斜面を16mほど登っていった上手の31号溝内に検出された成人女性である。保存はよくないが、全体の姿勢を知ることができた。推定身長は143cmで当時としても小柄である。東すなわち斜面下手に向かって倒れており、1号人骨と向かい合った状態である。しかし、ただ前向きに倒れたわけではない。

全体としてはうつ伏せであり、脊椎骨も骨盤も背面を上にしており、顔は右下を向いている。ほぼ全身が関節状態であるが、左寛骨<sup>かんこつ</sup>と仙骨<sup>せんこつ</sup>が二次的に動いている。下肢は右を大きく開いて膝を曲げ、足先を強く外に開いた状態である。左はまっすぐに伸ばしているが、足先を大きく内側に入れていて、かなり無理な姿勢である。上肢も同様で、右は肘を外に出して曲げた状態だが、左は強く曲げて肘が脊椎骨よりも右に入っている。

このような人骨の状態から見て、この女性は本来斜面を上っていて、左足を軸にして反時計回りに回転し、反対側に倒れたと考えられる。つまり、おそらくは迫ってくる火砕流を避けようと左に身をよじって倒れ、そのまま火砕流にのまれたと考えられるのである。骨盤の乱れは、空洞内で軟部組織が腐朽する際に、不自然な下肢の姿勢から負荷がかかり、関節が外れたと考えられる。

この人骨には、首の両側に管玉<sup>くだたま</sup>が数個伴っており、首



図8 3号人骨管玉(矢印)

飾りをしていたとみられる。また、顔の両側にもガラス小玉が十数点検出されており、位置からみて髪飾りの可能性がある。古墳時代の上位層女性の日常の装いを示すものであろう。

このように、現在発見されているのは4体のみであるが、2号人骨を抱いていた人物も居たはずであり、その他にも2号甲や矛を持っていた人物も居たはずであるが、検出されていない。おそらくはこの場にはもっと多くの人が居て被災し、ほとんどがS7火砕流で吹き飛ばされたと考えられる。発掘で出てきた4体はたまたま条件に恵まれて遺存していたと考えられるのである。

これらがわが国の考古学にとって重要な発見であることは言うまでもないが、調査はまだ継続している。今後の調査と研究の進展に期待したい。



図7 3号人骨

# 甲着裝人物が語ること

専修大学  
文学部教授 土生田純之

## 何があったのか

6世紀初頭、榛名山が爆発して大きな被害をもたらした。いわゆるF A（榛名山の爆発に由来する火山灰）として知られる堆積物が東方に広く広がっている。このことはすでに知られた事実であり、各地の発掘調査によって確認されている。中には渋川市中筋遺跡のように村全体が埋もれてしまった場所もある。しかし、これまで犠牲者の人影は未確認で、あるいは大半の人々は無事に逃げおおせたのではないかとさえ言われることがあった。よく知られているように、火山の噴火は1度の大爆発で終わるのではなく、何度かの予兆的小噴火が幾度かの休止を挟んであったのち大爆発が生じる、あるいはこの逆など幾通りものパターンがある。しかし、総じて何度かの短い休止期間がある。今日でさえ火山が一度爆発すると、今回の爆発が終息するのが何時になるのかということ予測することは難しい。一旦爆発が収まったように見えてもいつ何時再び爆発するか不明であり、それを予測することはきわめて困難なのである。私などは、おそらく古墳時代当時の人々は、爆発がいったん収まるや否や特に重要なもの以外については家財道具も放り出して、それこそ命からがら逃げだしたのではないかと考え

てきた。そのため、中筋遺跡ではいまだ十分に使用に耐える土器などが建物の中におかれたままの状態で見られたのだと理解していたのである。しかし、このことはその逆、つまり多くの人々が小爆発の休止によって安心して逃げ遅れ、犠牲となったこともまた考えられるということになろう。今回、金井東裏遺跡で見られた甲着裝人骨（1号人骨）やその近くで見られた乳児の頭骨（2号人骨）、成人女性の人骨（3号人骨）等は、まさにそうした「事実」を我々の眼前に見せたのである。

ところで甲着裝の人物が何故あのようなところで落命したのか（もちろん乳児の頭骨がなぜそこにあったのかということも含めて）、気にかかる。榛名山の爆発という人智を超えた自然による大事件が勃発している最中に、逃げるのであれば軽装であるべきだろう。にもかかわらず、まるで戦に向かうような重装備で命を落としている。このため、様々な意見が提示されてきた。突飛な意見はともかくとして、荒ぶる榛名の神（火山爆発を山の神が怒っているためであるとする考えは、律令時代にも普遍的に認められている）を鎮めるために正装して祭りを実施している最中の悲劇であるとする考えはあるいはそうしたことがあったかもしれないが、もちろんこれ



渋川市中筋遺跡の復元された古墳時代竪穴住居

を実際に証明するすべはない。しかし、以下ではこれとは異なった見解を、西暦 79 年にイタリア・ポンペイで惹起した悲劇を参考に述べてみよう。

## ポンペイとプリニウス

西暦 79 年 8 月 24 日、南イタリア、ヴェスヴィオ火山が爆発し、これによって周囲の町は壊滅的打撃を受けた。中でも当時約 2 万の人口を擁したポンペイは、発掘調査により往時の大半が復元されて悲惨な被害の実態を我々に見せている。また、さまざまな記録の存在によって、当時の人々の嘆きが今に伝えられてもいる。そうした記録のうち、当時 17 歳であった小プリニウスの手紙は、金井東裏遺跡出土甲着装人物の意味を考える時、大いに参考となろう。小プリニウスはローマ帝国地中海艦隊の司令官であった大プリニウスの甥である。大プリニウスは、被害にあった住民を救うために困難のなかヴェスヴィオ山の麓に上陸したが、おそらくは硫黄等の火山性ガスによって落命した。この事実を見聞した小プリニウスは、歴史家タキトゥスの求めに応じ、自らの脱出行を含めて 2 回にわたる手紙を書いた。

その内容は実際に体験したものでないと記せない真に迫ったものであるが、私が注目するのは、大プリニウスの行動である。すなわち、自らの危険を顧みず、ローマ帝国の高官として、あるいは友人の危機に対する友情の発露としての使命感から住民救出に向かい落命したのである。今回発見された金井東裏遺跡の甲着装人物も、これに通じるところあるのではないかと考えられる。彼が身につけた小札甲を始め、周辺に散らばっていた鉄製武器等を総合すると、全長 100 m 級以上の前方後円墳の被葬者の副葬品に通じるのであり、甲着装人物の並々ならぬ身分が想起されるのである。すなわち自らの「領地」の被害を検分し、善後策を検討するために、見回りを行った可能性がある。そもそも逃避等の移動には軽装が相応しく、そうした行動に困難をきたす重装備で出かけること自体不可解である。そこには威厳を示す必要性を伴った支配者としての矜持きやうじが強く感じられるのである。

もちろん、こうした考えには異論が生じる余地もまた多い。甲着装人物の近くで発見された別の甲（2 号甲）は当初やはりこれを着装した人物がいるものと予想されたが、実際は人が着装していた痕跡は見つかっていない。したがって、財宝とも呼べる貴重な道具ひつを櫃ひつか何かに入れて持ち出して避難する途中に火砕流に出会い、櫃ごと投げ出されて中身の道具が散らばったとも考えられよう。この場合は、甲着装人物が避難に有利な軽装ではなく重装備であったことの意味も相当に異なる。すなわ

ち、見につけることができるもの（財産）はできるだけ身に着けて避難したとみることになるのである。

上記両者のいずれが正しいか、今後の調査結果を待たねばならないが、いずれにしても当時における為政者の人間的な姿を垣間見ることができるのである。そして、このことこそが金井東裏遺跡の重要性として指摘できるのである。

## 考古資料の「危うさ」

さて、文献史料の場合、執筆者の政治的、社会的、文化的等さまざまな位相によって、執筆内容に著しい「偏向性」、あるいはさらに進んで偏見に基づく事実とはかけ離れた記述がみられることも珍しくない。今日に照らして、我々を取り巻く状況についての諸見解を参考にすれば理解はたやすいだろう。もっともこうした問題点こそが当時のある集団等に属する人々の思想解明に貴重な史料となるのであり、そこにこそ文献史学の醍醐味がある。しかし、ここでは記録当時の実態を知るという点についての吟味に絞って議論を進める。

さて、以上のあり様から、考古資料についてはいわゆる捏造資料ねつぞうでなく、当時の資料であることが証明できれば第 1 級資料として評価できることに誰しも異論をはさまないだろう。ところが、そこには実は別種の問題点が潜んでいることに留意しなければならない。このことについてはすでにドイツの考古学者、エガースが指摘している。つまり、今日発見され発掘された考古資料の「選択制」についてである。例えば、古墳時代の甲冑はそのほぼすべてが古墳から出土する。古墳の意味や機能については、傾聴すべき様々な見解が提示されている。しかし、いうまでもなく古墳は第 1 に墓である。したがって、古墳時代当時の人々が抱いていた死生観と切り離せないものである。つまり、古墳の中に死者にともなって埋納された副葬品は、当時流通し使用していたすべての品物を埋納したのではない。そうした死生観に基づいて、死者にとって必要だとされるもの、あるいは死者を送る儀礼に欠かせないと考えられていた品物を選択して埋納したにすぎない。そのように考えてよいのであれば、古墳出土の遺物は、あるいは儀礼用に製作されたものであり、実用に供された遺物とは微妙に異なるのではないかとの疑念をも感じさせるのである。また、古墳に埋納された副葬品は実際の使用状況を語ってはくれず、資料によってはどのように使用するものなのか不明瞭なものも存在するのである。以上のように考えるならば、金井東裏遺跡の重要性をさらに強く認識させられる結果となるのである。

## 5世紀後半～6世紀初頭の西毛

当時の西毛は日本列島の中でも有数の勢力を誇っていた。古墳の数や規模がそのままの形で勢力の大小と直結するものではないにしても、これらの示す数値は、確かに列島でも後の畿内を別にすれば抜き出ている。このような発展をもたらした原動力を考える必要がある。古墳時代の社会は内部の自立的発展を基礎としながらも、朝鮮半島や中国からの強い文化的影響のもとにあった。特に朝鮮半島からは大勢の移住民を迎え、列島の発展に直接的な影響を受けている。もちろん、移住者を含めた文化の流入については、そうした状況に波があり、特に強く認められる時期がいくつか指摘されている。すなわち、①4世紀後半、②5世紀後半、③6世紀後半～末の三期である。

ここで問題となるのはもちろん第二の5世紀後半である。高句麗によって百済が滅ぼされ（475年。これは第一次滅亡であり、この後王族の一部が南方に逃れて再建国する。最終的な滅亡は、新羅・唐の連合軍に滅ぼされた660年である）、これに伴う混乱状況から多くの渡来人が列島にやってきた。一方、日本側も新しい技術獲得の必要性から、むしろ彼ら難民を積極的に受け入れたものと思われる。こうした新来技術の代表的なものとして、陶器（須恵器）や金工芸品の生産とともに、いやそれ以上に馬の飼育技術（これに必要な馬具生産、さら

には馬具生産を含む鉄器技術の向上等も重要である）があげられる。当時の馬具出土量は信濃と並び西毛が圧倒的に多い。金井東裏遺跡においても、馬の蹄跡が多く発見されていることが、こうした状況を何よりも雄弁に物語っているのである。また、西毛では当該期の渡来人に由来する墳墓や住居址が多く発見されている。中でも高崎市の<sup>けんざきながとろにし</sup>剣崎長瀨西遺跡では渡来人の存在を示す住居や墳墓が発見されている。特に墳墓では、在来の倭人と渡来人のそれが、様々な要素から明確に峻別され墓域も区画されながら、大きくは共同の墓地群を形成しており、区別されながらも共生していた実態が明らかになった。

このような考察や事例を前に、金井東裏遺跡の重要性と今後の調査に期待されるものはおのずから明らかであるといえよう。最後にこのような諸点を挙げて小稿を閉じることにしたい。

①古墳出品（副葬品）のような、ある種の選択に基づく資料ではなく、当時の「<sup>なま</sup>生の資料」を目にできること。

②さらに進んで、当該期の人々の暮らしぶりが想像ではなく、眼前に提示されること（この点については、彼らの生活拠点たる被災当時の住居が重要であるが、すでに一部とはいえそれが確認されており、今後の調査に期待がかかる）。

③甲着装人物を始め、馬を含めて当時の人々の混乱状況を復元し、災害時の対処法についても一考する縁となることが期待される。

さて、筆者の研究者としての立場を離れた一個人の希望としては、甲着装人骨は避難途上の悲劇を示すのではなく、あくまでも庶民を救うヒーローであってほしいと願っている。こうしたことさえいずれ解明される可能性がある。繰り返すが、金井東裏遺跡の重要性は、何気ない日常の中にある日突然生じた天変地異に対し、人々がどのような行動をとったのか、そしてどのような結末を迎えたのかという詳細を、生の形で伝えてくれていることにこそあるのである。



高崎市剣崎長瀨西遺跡の遠景（高崎市教育委員会提供）

# 金井東裏遺跡の頃の上毛野地域

公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事 右島和夫

ここでは、金井東裏遺跡、あるいはそこから発見された甲着装男性等がどのような時代背景の中にあっただのかを考えてみることにしたい。

まず、金井東裏遺跡の直接の基盤である渋川市域を中心とした榛名山東麓の様相、さらに、これを含む上毛野（かみつけぬ（の））地域（現在の群馬県地域に近い）、あるいは東国（現在の関東地方に近い）の動向を見ていく必要がある。その際、古墳時代の日本列島を主導した近畿地方、とりわけ奈良県・大阪府域を中心とする畿内地域（その政治勢力を「ヤマト王権」と呼ぶ）が大きく影響していたことを踏まえる必要がある。

次に、男性が身につけていた小札甲が、この時期の中でいかなる性格を持っていたのかが、遺跡解明のカギを握っている。あわせて検討したい。

## 5世紀後半を生き抜いた甲着装男性

甲着装男性が榛名山噴火の犠牲に遭ったのは、6世紀初頭である。この人骨を調査した九州大学の田中良之氏は、老人の域には達していない成人男性の可能性が高いとする。このことから、男性が榛名山東麓を舞台に活躍していたのは、5世紀後半の頃ということになる。

渋川市域を中心とした榛名山東麓は、6世紀初頭と同中頃の2度の榛名山大噴火の堆積物で厚く覆われているため、噴火以前の地域の歴史的状況は断片的にしかなかった。ところが、昭和40年代後半からの日本列島をあげての大規模開発の大波が渋川市域にも訪れ、その厚い噴火堆積物を取り除いての大規模工事が各地で行われるようになった。それに伴って、事前に発掘調査が渋川市教委や県埋文事業団によって行われるようになり、堆積物下の遺跡が数多く姿をあらわしてきた。

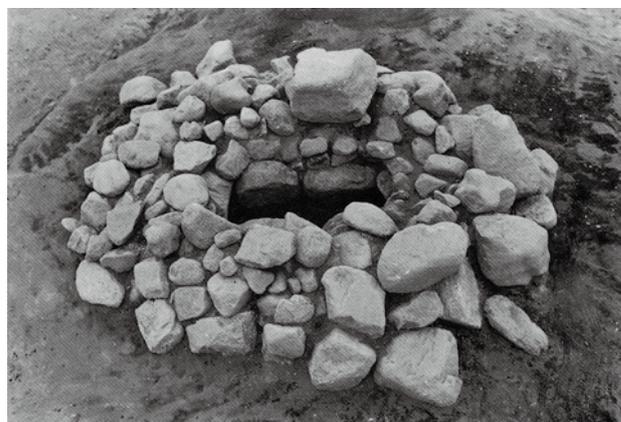
それらを通観して気づくことは、5世紀後半の榛名山東麓は、非常に活発に地域展開がはかられていたことである。しかもこの時期に急速に進行している。甲着装男性は、榛名山東麓の躍動的な展開の真っ只中に身をおいていたわけである。

## 5世紀後半の榛名山東麓

ここでは、これまでに発見・調査されている古墳を中心に見ていく。前述したように、当地域の5世紀後半の

様相は徐々に明らかになっている。とりわけ古墳は、渋川市域南部で、空沢古墳群、石原東古墳群、行幸田山遺跡古墳群、半田南原遺跡古墳群等があり、また利根川沿いの市域東部では東町古墳、坂下町古墳群、大崎古墳等がある。ただし、これらは、あくまでも火山噴出物下に掘削が及ぼされた結果、はじめて発見されたものであり、同じ時期の古墳は、まだまだ数多く埋もれていることは間違いない。それでは、主要なもののいくつかについて具体的にみてみることにする。

空沢古墳群では、古墳群所在地の一角が広く調査され、その全貌が明らかになっている。5世紀後半に属し、密集する円墳40基以上が調査されている。また、円墳と円墳の間から、竪穴式石槨のまわりに角礫あるいは円礫を方形ないし楕円形に寄せ掛けた積石塚と呼称される小型墓が見つかる。これは、高崎市剣崎長瀬西遺跡をはじめとし、榛名山麓を中心とした西毛地域で方墳と

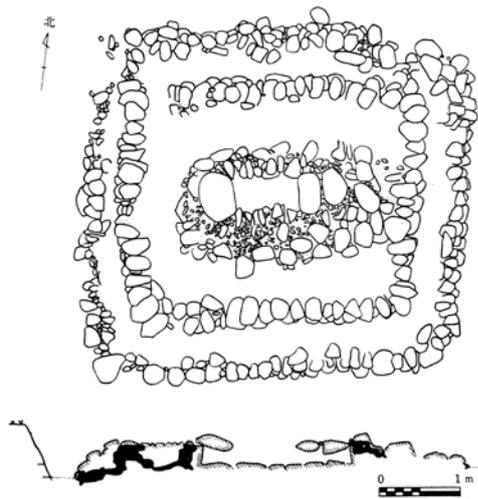


空沢古墳群 31号墳（長方形積石墓）

ともに見つかり、渡来人に関わるものとされている。実際、空沢古墳群からは朝鮮半島系の土器が見つかる。

坂下町古墳群は、金井東裏遺跡の南東2.2kmに所在し、やはり5世紀後半である。全部で6基が確認され、1～5号墳は一辺が2ないし3mの長方形に川原石が低く積まれたもので、空沢古墳群で見つかったものに通じる。その中心に人体がギリギリ入る竪穴式石槨が見つかる。これらから少し離れた6号墳は、一辺が約5mの2段構造の方墳で、明らかに前の5基の上位に位置する。

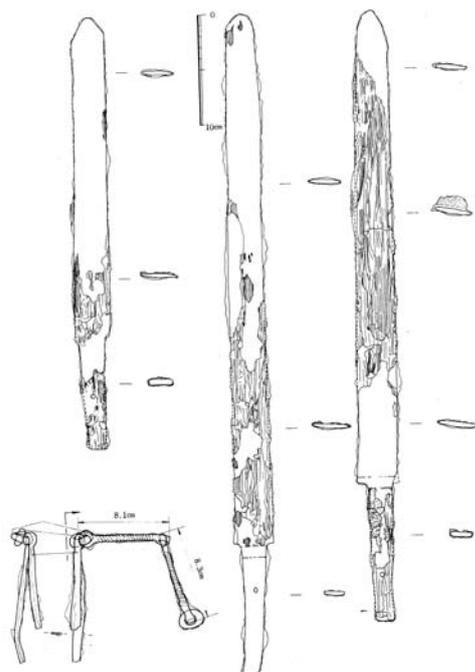
この坂下町古墳群から南東に少し下ったところで、同



坂下町古墳群 6号墳墳丘測量図（『北群馬・渋川の歴史』より）

じ火山灰層下から見つかった東町古墳は、2段構造の方墳で、上段の一辺が約5.8mで、その下に一回り大きい下段が埋まっている可能性が強い。須恵器甕や数多くめぐらされた埴輪の存在から、坂下町古墳群の上位に位置することがわかる。この墳丘構造に酷似しているのが、高崎市箕郷町下芝の谷ッ古墳である。主体部から、朝鮮半島系の金銅製飾履、馬具等の豊富な副葬品が出土している。

これらのすべてが、基本的に方形原理の墳丘ないし区画墓である点は注意される。同じ時期の上毛野地域を広く見渡した時、古墳の大半が円墳だからである。在地勢力が円墳を造ったのに対して渡来系集団が方墳・方形墓を造った可能性が十分考えられる。



金井丸山古墳の剣・毛抜形鉄製品（『丸山古墳調査報告書』より）

なお、金井東裏遺跡に西接して金井丸山古墳がある。墳丘構造は不明だが、主体部から鉄剣3と毛抜形鉄製品が出土している。形が似ているので付けられた名称で、必ずしも毛抜きとして使用されたわけではない。ピンセットのような部分の先の2連のねじり棒は、腰から吊り下げたことを物語る。上毛野地域ではこの一例のみで、全国的にも16例ほどである。一方、朝鮮半島の古墳からの出土も知られている。古墳の位置的関係から、甲着装男性との関係性が大いに注目される。

榛名山東麓一帯には、5世紀後半に渡来系の集団が居住していたことが考えられる。ただし今回の小札甲着装男性が、渡来人と限られるわけではない。これら渡来人を受け入れた在地勢力もまた確実にいたからである。いずれにしても、この男性が渡来人と深く関わる立場にあったことは間違いない。

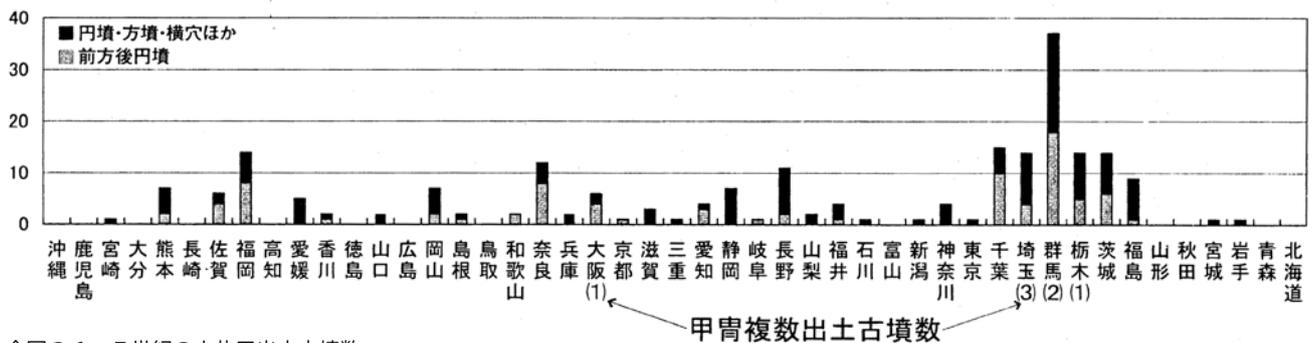
その意味では、その後の調査で、本遺跡から、ほぼ同じ時期に属する馬の蹄跡、馬の歯が見つかったことは重要である。後述するように、このころから、上毛野地域では、馬生産が専門的技術を備えた渡来人を中心に一気に開始されたと推測されているからである。

### 着装していた小札甲について

発見された男性が甲を着装していたことが、この人物を知る上で最も大きな手掛かりになる。その場合、これが「小札甲（こざねよろい）」という甲の形式であることがさらに重要である。



群馬県立歴史博物館蔵 天の宮古墳出土の小札甲（復元品）



全国の6・7世紀の小札甲出土古墳数

(内山敏行「小札甲（挂甲）一北関東西部における集中の意味一」『季刊考古学別冊17』2011 雄山閣より）

甲冑複数出土古墳数

小札甲は、4世紀から5世紀にかけて使用された「短甲（たんこう）」と呼ばれる甲の種類から5世紀後半に交替していった新しいスタイルである。短甲が大ぶりの鉄板何十枚かを革紐や鉄釘で繋ぎ合わせて造るのに対して、小札甲は小札と呼ばれる非常に小さい鉄板を千枚近く革紐や組紐でつづり合わせて造るものである。当然、小札甲の方が身に着けたとき可動性に富み、武具として大幅にすぐれている。

日本列島では、5世紀中頃を前後した頃には登場し、5世紀後半になると各地の首長層に点々と認められるようになる。しかし、しばらくは短甲が主流で、両者の主客逆転は6世紀になってからである。

小札甲が発見されるのは、今回の金井東裏遺跡を除けば、古墳からの副葬品に限られる。小札甲を精力的に研究している内山敏行氏によると、まだ広く普及していない5世紀後半の段階では、近畿地方と関東地方に集中し、中でも上毛野地域が最も多い。さらに、短甲から小札甲に主役の座が取って代わる6世紀の段階になると、上毛野地域の首位はさらに明確になり、また他の東国の諸地域からも数多く認められるようになる。なぜ上毛野地域、なぜ東国なのかが問題になってくる。

ところで、この甲の製作には、最新の高度な技術力が必須であった。それゆえ、その生産は当時の最先進地域であった畿内（ヤマト王権）のお膝元で独占的に行われた。その上で、ヤマト王権が上毛野地域に重点的にもたらしたことを注意する必要がある。

上毛野地域で小札甲を保有している古墳は、保渡田古墳群の井出二子山・保渡田八幡塚古墳、高崎市八幡の平塚古墳をはじめとする最大級の前方後円墳である。と同時に、谷ッ古墳や高崎市普賢寺東古墳をはじめとする方・円墳からも出土している。ただし、これらは前方後円墳に準ずる有力古墳である。総じて支配者層に限定されていたことは間違いない。金井東裏遺跡で見つかった2領の小札甲の保有者も自ずから支配者層に限定されるとしてよい。

5世紀後半の畿内と東国

5世紀後半は、ヤマト王権と上毛野をはじめとする東国諸地域との間に、新たに密接な関係が結ばれるようになった時期に当たる。その中心的な位置を占めたのが保渡田古墳群や、稲荷山鉄剣を出土した埼玉古墳群の勢力だった。小札甲の上毛野、さらには東国への集中は、ヤマト王権の軍事的基盤の一翼を担う地域として東国との関係を一層強めていったことを示している。

畿内と東国の密接な交流を可能にしたのは、馬の登場により後の東山道ルートに近い内陸ルートで結ばれたことが大いに関係している。馬はもともと日本列島にいた動物ではなく、5世紀になって朝鮮半島からもたらされた。馬の登場は、一大革命であり、ヤマト王権が積極的に導入・生産に当たったことは言うまでもない。馬の先駆的な生産遺跡が大阪の河内地域で数多く見つかり、朝鮮半島からの渡来人の従事が知られている。その馬生産が東日本にいち早く伝えられたのが、伊那谷（飯田市周辺）と上毛野地域西部である。5世紀後半、榛名山東南～東麓一帯で朝鮮半島系の遺物が多く確認されるのは、馬生産に従事した渡来人の存在を物語る。その普及ぶりを如実に物語るように5世紀後半の上毛野地域の有力古墳からは、小札甲とともに馬具が数多く確認されている。この動きにヤマト王権の積極的な意図が作用していたことは間違いない。

金井東裏遺跡の甲着男性もそのような動きの表舞台に立っていたのである。



金井東裏遺跡で見つかった馬の蹄跡